サスティナブルな地球・社会のための“学び”応援マガジン

国連持続可能な開発のための教育の10年　イーエスディー・レポート

ESDレポート

Education for Sustainable Development

vol.20 2009秋

2009年11月1日発行

NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。ずっと続く地球、社会、地域のためにすべての人が取り組む。そんな豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の「学び」です。「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が2005年からスタートし、世界各国で取り組まれています。

チョンクニア村でのリーダー研修

自立を目指すコミュニティの人たちの底力を信じて

～世界寺子屋運動カンボジアの現場から～

20号の見どころ

- 学びのデザイン：コミュニティ開発における学びのキーワードは「自立」と「リーダー育成」(p.2-3)
- つなぐ人の視点：企業とNGOの協働のつなぎ手が重視するスタンスとは？（p.4-5）
- 数字で見る社会：16組に1組（p.4）
- 発見身近なESD：自分の視点から、解決に向けたアクションを起こそう（p.6）

本シリーズは、ESD につながる全国のさまざまな活動を、「教育」の視点で紹介していく事例レポートです。

地域の自立に向けた学びのデザイン

カンボジア・シェムリアップ州

「すべての人に教育を（EFA=Education For All）」をスローガンに、日本ユネスコ協会連盟※1 が 1989 年に始めた世界寺子屋運動※2 は今年 20 周年を迎えました。この運動を通じてこれまで学んだ人の数はおよそ 124 万人。建てられた寺子屋の数は約 500、民家などで行われた寺子屋教室の数をあわせると 1 万以上にのぼります。この 20 年間を振り返ってみると、支援展開は点から面に広がり、寺子屋も現地では CLC（Community Learning Center ＝地域学習センター）と呼ばれるようになり、識字教育のみならず、持続可能なコミュニティ開発の拠点、さらには平和構築のための相互理解の場へと、多目的に機能しています。

今回は、カンボジア・シェムリアップ州で展開している「アンコール寺子屋プロジェクト」（以下、寺子屋プロジェクト）を事例に、どのように CLC を地域に根付かせ、人びとの成長や地域の自立発展を促しているのかをご紹介します。

水上村での寺子屋活動

トンレサップ湖に浮かぶチョンクニアの水上村。チョンクニア村は、7 つの集落から構成されており、人口は約 6900 人ですが、子どもの就学率は 56%、成人識字率は 47% にとどまっています。寺子屋プロジェクトは、2006 年よりこの村の寺子屋活動を通じて、識字教育を推進すると同時に、人びとの生活向上、そしてコミュニティの発展を後押ししてきました。

「持続可能」な寺子屋運営のためのポリシー

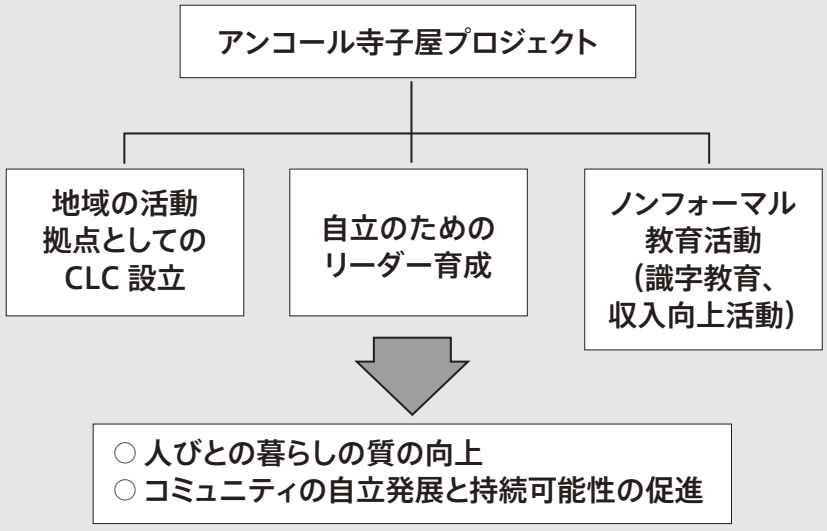
寺子屋プロジェクトでは、CLC を「コミュニティの人たちの、コミュニティの人たちによるコミュニティの人たちのための学びの拠点」にするため、とりわけ地域のリーダー育成に力を注いできました。

また、寺子屋プロジェクトは「育成活動への資金的・技術的支援は惜しまないが、寺子屋を運営する人たちへの給与支援は行なわない」そして「寺子屋を建てる場所の決定と土地の確保は地域に任せる」といった方針を貫いてきました。そうすることで、寺子屋のオーナーシップと自立力、つまりプロジェクトの持続可能性を高めることを意図しています。

寺子屋を運営する人はどうやって選ぶ？

寺子屋運営委員会を設立する時は、まず地域住民の中から候補者を募り、村内選挙を開催してメンバーを決定します。そのために村に何度も足を運び、人びとに寺子屋の意義を説明しました。チョンクニアでは最初に、選挙により漁業組合長のオム・ナリー氏（11 月に来日予定）※3 が寺子屋運営委員長に選出されました。その後、別の水上村へのスタディーツアーなどを企画し、そのときの参加メンバーを中心に、村の有志たちから成る寺子屋運営委員会が発足しました。

「アンコール寺子屋プロジェクト」構図



「参加型研修」にこだわるリーダー育成

地域で寺子屋を担っていくリーダーの育成では、寺子屋を自らが運営し、また寺子屋での学びを持続可能な地域づくりにつなげられるように、フィールドビジットや他村との経験共有、グループワーク、意見交換会などを中心とした参加型手法で研修を行っています。内容は、「寺子屋の機能」「寺子屋運営委員会の役割」「寺子屋プログラムの企画方法」「プレゼンテーション手法」「モニタリング手法」「問題解決方法」など多岐に渡ります。研修の終わりには、各々の寺子屋運営委員会が必ず今後の目標や計画について話し合い、その内容を直接寺子屋に貼り出します。研修後は、寺子屋運営委員会自身が、「こんな研修をしてほしい」という声に応えさまざまな団体や省庁と連携を図っています。

“自立” に向けたノンフォーマル教育活動

リーダー養成と並行して、寺子屋では村の人びとを対象に、識字教育や村の暮らし

を良くしていくためのさまざまな活動をしており、なかでも村の自立発展と持続可能性を促すためのプログラム“一村一品運動”が注目されます。例えばチョンクニア村では、トンレサップ湖の環境改善と人びとの生活向上に役立てることを目的に、湖のホテイアオイを加工し、手工芸品を製作する技術訓練講習を実施しました。数週間ほどの講習に参加し、技術を習得した女性たちが練習を重ねて腕を磨き、今では市内の土産物屋から大量発注を受けるほどになりました。こういった技術は、村の女性たちの収入向上だけでなく、売上金の2割が寺子屋運営費に充てられることで、寺子屋の持続可能性にもつながっています。

このように世界寺子屋運動は、寺子屋（CLC）を通じた学びの拠点づくりと地域の持続可能な発展を目的に、住民の識字率向上や生活の質の改善をはじめ、その地域にある資源を活かしたノンフォーマル教育活動を応援しています。

（日本ユネスコ協会連盟　木村まり子）

トンレサップ湖に浮かぶ水上寺子屋（シェムリアップ州チョンクニア村）

水上村の特産品、ホテイアオイ製バッグづくりに励む女性たち

地域リーダーの声

チョンクニア村寺子屋運営委員
チー・サベイ氏（55歳）

私が寺子屋運営委員になろうと思ったきっかけは、2006年12月に行われたプレック・トアへの研修ツアーだった。生まれて初めて別の水上村へ出かけ、あまりの環境の違いに驚き、同時に、自分たちの村の未来予想図を初めて思い描くことができた。自分は村の役人ではないが、寺子屋運営にかかわれるのであればと立候補し、同じツアーに参加した4人（うち2名は女性）とともに寺子屋運営委員会を設立した。チョンクニアの寺子屋が地域主体で運営されるCLC第1号ということで、全国各地から研修で訪問を受ける機会も増え、今は自分たちの体験談を他の村の寺子屋運営委員たちに共有するなど、研修講師を務められるまでになった。寺子屋運営を通して自分自身が裕福になったわけではないが、村の人たちのために働いているという誇りが、ボランティアで運営委員を続ける原動力になっている。

寺子屋訪問者に活動紹介をするサベイ氏

※1　日本ユネスコ協会連盟
「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とうたうUNESCO憲章に共鳴した人びとにより、1947年、世界にさきがけて仙台で民間ユネスコ協会が設立されました。社団法人日本ユネスコ協会連盟は、その後全国に広がり始めた民間ユネスコ協会の連合体として1948年に創設されたNGOです。現在全国各地に合計271のユネスコ協会があります。

※2　ユネスコ世界寺子屋運動
世界にはいまだ学校に行くことができない子どもが7500万人、教育の機会がないために文字の読み書きができない大人が7億7600万人いると言われています。貧困のため幼いうちから働かなくてはならない、戦争や内戦のために勉強することができない、こういった負の連鎖を、基礎教育の普及と人材育成によって断ち切り、地域社会、そして地球社会に平和の礎を築くことを目標に「ユネスコ世界寺子屋運動」は活動しています。現在、世界寺子屋運動は、アフガニスタン、インド、カンボジア、ネパール、ラオスの5カ国で活動を行っています。

※3　寺子屋運営委員長、オム・ナリー氏が11月に来日予定
11月10日(火)18:30～、「第8回ESDカフェ～寺子屋運動に学ぶ持続可能なコミュニティを育む学びのヒント」開催。詳細、お申し込みはESD-Jウェブサイトにて。

お問い合わせ先　**社団法人 日本ユネスコ協会連盟**　＜ESD-J団体正会員＞
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階
TEL：03-5424-1121 FAX：03-5424-1126　URL：https://www.unesco.jp/

つなぐ人の視線 ＜第６回＞　一般社団法人 日本経団連事業サービス　長沢恵美子さん

このコーナーでは、社会のつなぎ手にお会いし、大切にしている価値・方法・未来への思いなどをうかがいながら、「つなぐ」という仕事について考えていきます。第６回は、日本経団連 1% クラブ事務局など、経団連の社会貢献活動・CSR 推進担当として、長年にわたり企業と NGO をつないできた長沢恵美子さんにお会いしました。

セクターを超えた対話のプラットフォームが社会を変える

企業と社会をつなぐ仕事を通じて印象に残っている出来事は？

ある NGO から、「イベント用テントを被災地や難民キャンプでも活用できるように改善して欲しいと思うが、メーカーへうまく働きかけられない」という相談を受けました。そこでメーカーの渉外担当者を通じて、製品の設計担当者と NGO との対話の場を設定してもらいました。最終的には NGO のスタッフがメーカーへ出向し、一緒に製品開発をすることになりました。結果的に、企業にとっても社会的なニーズを製品開発に活かすことができ、NGO にとっても現場でより有効なツールを手にすることができたのです。異なる文化を持った組織同士の対話を促し、企業と社会に変化が起きる、そんな瞬間はつなぎ手冥利につきます。

新学期を迎える中越沖地震の被災地の子どもたちへ
複数企業から贈られた文房具を詰め合わせる企業人ボランティア

長沢さんが社会貢献活動のコーディネーターとして心がけてきたことは何でしょう？

私は社会貢献活動の推進担当になる前から、ずっとボランティア活動にかかわってきました。だから仕事として携わるようになって、「長沢が好きでやっている」と言われないために、“しくみ化”するということを常に心がけてきました。例えば、「災害ボランティア支援プロジェクト会議」や「ジャパンプラットフォーム」の設立にもかかわりましたが、これは被災現場のニーズと企業の支援をつなぎ、支援の成果を企業へフィードバックするためのしくみです。その場その場で柔軟に人や組織をつなぐことも大切ですが、協働のしくみを用意することによって、より多くの企業がかかわることができ、その効果を見えやすくできるのです。

この社会貢献活動の効果をフィードバックすることもコーディネーターとして重要な役割だと思っています。個人のボランティア活動においては、社会に対して行動したことを本人がふりかえり、きちんと意義を見出すことが次の行動へとつながります。それは企業も同じです。企業の社会貢献活動が、社会的にどんな意味があったのかを “見える化” し、評価できるようにすることで、企業は社内外の理解を得られ、継続的に活動を続けられるのだと思います。

数字で見る “社会” 第２回

16組に1組

増え続ける日本の国際結婚

2007 年、日本における全婚姻件数 71 万 9822 組のうち、3 万 1807 組が夫日本・妻外国、8465 組が妻日本・夫外国という組み合わせでした（厚生労働省の人口動態統計より）。全体で 16 組に 1 組の割合にのぼります。とりわけ、男性の国際結婚の増加が顕著となっています。家父長的な夫婦関係から自由でありたいと考える日本女性が結婚に背を向ける一方、結婚難に陥った男性が仲介業者や知人の紹介により、途上国の女性との結婚を選ぶという傾向が高まっているようです。

このような背景の中で、外国人妻に対する DV（家庭内暴力）は、日本人女性に対するよりもはるかに高い比率で起きています。厚生労働省によると、2007 年度に一時保護された DV 被害者 4549 人のうち 8.95% にあたる 407 人が外国人女性でした。このように、女性の人権の視点から国際結婚を見たとき、日本における「持続可能な多文化共生」の実現には、DV 問題をはじめとしてさまざまな課題が浮かび上がってきます。

（財団法人 アジア・太平洋人権情報センター　藤本伸樹）

ESD-J 団体正会員

参考文献：
（財）アジア・太平洋人権情報センター編『アジア・太平洋人権レビュー 2009: 女性の人権の視点から見る国際結婚』（現代人文社、2009）

企業と NGO のつなぎ役としてどんなスタンスで臨んでいますか？

視点やアプローチ方法のアドバイスはしますが、こうやったらいいと具体的な活動や事業を導くことはしません。それは、企業であれ NGO であれ、担当者や組織が自分で苦労し、悩み、考えないと、その組織の力にならないと思うからです。それに、お互いの組織の強みや弱みを知っているのもそれぞれの組織の人たち。お互いが自発的に動くことで、次につながる変化を起こすことができると思っています。ちょっとしたひと押しがきっかけで、私の想像を超えることが起こり、評価の高い取組みにつながることがあります。この仕事のおもしろいところですね。私はいつも後ろで、にやっと笑っているんです。

それと、私はよく歯に衣を着せない言い方をすると言われます。それは、ダメなことはダメと、はっきり言わなければならないと考えているからです。例えば、NGO が企業へ働きかける場合、資料の作り方やアプローチの方法が対立構造にならないようにしなければなりません。価値観の異なる組織同士だからこそ、気がつきにくいことは、はっきりと伝えるようにしています。

企業とNGOをつなぐ上で難しいと感じることは何ですか?

合意形成のプロセスがお互い違うことです。NGO では、そのミッションを大切だと思う人が集い活動しています。かかわっている人にそれぞれの思いがあるので、合意形成には時間がかかります。一方、企業はトップダウンで物事が進めば合意形成のスピードは非常に速いですが、社会的正義だけでは会社を動かすことはできません。両者がお互いの文化の違いを理解し合わないと協働はうまくいきません。以前から社会貢献に熱心に取り組んできた企業は、その活動を通じて NGO のスタンスやプロセスをよく理解しているため、熱心でない企業に比べ社会に対する対応力に差が出てきていると思います。この社会的感度や対応力は、これからの企業にとって重要な資質であると思います。

長沢 恵美子（ながさわ・えみこ）

1983 年、（社）経済団体連合会事務局入局。1996 年から企業の社会貢献活動推進のため、各社の担当者とともにさまざまな課題について議論しつつ、NPO と企業の連携の可能性を探ってきた。2003 年からは企業の社会的責任（CSR）の推進も担当していた。今年 4 月、研修や出版などの事業を行う日本経団連事業サービスに出向。現在、総合企画・事業支援室参事 兼 研修担当参事。この秋、新たに、企業の担当者向け「社会貢献基礎講座」をスタートさせる。

これからの夢、やっていきたいことは何ですか？

さまざまなセクターのコーディネーター同士の対話のプラットフォームをつくっていきたいと思っています。現在、日本経団連事業サービスに出向し、「社会貢献の基礎講座」の準備を進めています。講座が終了した後でも、企業の社会貢献担当者と社会の多様なコーディネーターとがつながれるようにしたいと思い、企業が困ったときにつながりたいと思える人を講師として人選しました。

もうひとつできたらいいと思うことがあります。それは、「企業の社員一人ひとりが 3 つの NGO 会員になろう！キャンペーン」です。一般の人が NGO の会員になることで、社会的課題に対して NGO がどのように行動し、どのような合意形成プロセスを経て活動しているかについての理解が広がります。複数の NGO に接することで、NGO を比較することもできます。現在の NGO は特に関心の高い人たちが参加し支えていますが、一部の人だけの活動では広がりません。経団連の会員企業は 1300 社あります。それぞれ数百～数万人の社員がいます。各社の社員が NGO を支えることで、社会的活動の理解が広がり、NGO の活動基盤も強固になるでしょう。

これからも私は、私ができる方法で、セクターを超えた理解と協働の場を生み出すしくみを創り出していきたいと思います。

（聞き手：ESD-J 佐々木雅一）

★ 12 月 8 日（火）第 9 回 ESD カフェは、長沢さんをゲストに迎えます。詳細は、ESD-J のウェブサイトでお知らせします。

発見 身近な活動の ESDらしさ ＿ 私からはじめるこれからの150年 ～横浜開国博 Y150 の市民創発プログラム～

9 月末まで行なわれた横浜の開港 150 周年記念のイベント「開国博 Y150」のヒルサイド会場では、「私からはじめるこれからの 150 年」をテーマに、公募で集まった横浜市在住者を中心とする市民スタッフが、それぞれに発信したいテーマで出展を行なった。

「地球や地域が多様な課題を抱える現世代において、大切なことは一人ひとりが自分の視点から大切にしたいことや解決したいことへのアクションを少しずつでも起こしていくこと」というコンセプトのもと、温暖化防止の啓発や地域コミュニティ再生の場づくりなどの社会的テーマ、コスプレカルチャーの再認識、日本の伝統文化体験など、180 以上のプロジェクトが行なわれ、週替わりの体験プログラムの提供やパネルの展示などで、楽しみながらテーマを発見する機会を来場者に提供した。

2008 年の初頭から始まった 1 年半ほどの準備ワークショップ期間を経て、それぞれのプロジェクトの推進役となった市民スタッフには、持続可能な社会づくりに向けて、これからいっそうの活躍を果たしていくことが期待される。（開国博 Y150 市民参加ディレクター：吉沢 卓　ESD-J 個人正会員）

竹を活用したゆったりとした空間では、農作業体験や稲作体験などのプロジェクトも展開された。

3 震災から再生する農的な暮らしの実践

くりこま高原自然学校代表　佐々木豊志（ESD-J 団体正会員）

「自然と共生し持続可能な平和で創造的な暮らしができる“人づくり”と“社会づくり”に寄与する」くりこま高原自然学校が取り組んできた持続可能な暮らしは、昨年 6 月 14 日に突然襲った「岩手・宮城内陸地震」によって絶たれてしまった。

あれから 1 年 4 ヶ月が経過したが、現在は里山と田んぼに囲まれた栗駒松倉に拠点を移し、震災からの復興と再生に取り組んでいる。傷ついた山と大地では災害復旧の工事が進められているが、自然学校があった耕英地区は未だに立ち入りの制限が解除されない状況が続いている。しかし、持続可能な農的な暮らしを目指してきた私たちは、場所を変えても「ESD を意識した暮らし」を創造している。

自然学校の役割には“つなぐ”という役割があると思っている。人と人、人と自然、人と社会をつなぐ。どんな状況でも前向きにさまざまなつながりを創ることを忘れなかった。震災直後から現地のようすや取組みの発信を続け、たくさんの方々とつながることができ、そしてたくさんの支援をいただいた。日本エコツーリズムセンターの支援で“震災応援エコツアー”を実施し、被災地の大きく変化した自然地形と被災地の暮らしを紹介し、多くの方に被災地をつなぐことができた。

くりこま高原自然学校は拠点を里山に変え、米づくりも始め、馬もヤギも飼い始め、農的な暮らしがさらに広がっている。これまでも幾度か活動してきた北上川にも拠点をつくった。これからも里山の自然学校、北上川自然学校との活動を広げ、新たな持続可能性に取り組んでいきたい。

※くりこま高原自然学校の活動および震災復興の取組みについては、http://kurikomans.com/ にてご覧いただけます

4 もったいないばあさんのワールドレポート展

絵本作家　真珠まりこ（ESD-J 個人正会員）

2008 年より、拙著絵本のキャラクター「もったいないばあさん」をガイド役にした展示会「もったいないばあさんのワールドレポート展」を開催し、巡回展示しています。この展示会は、気候変動、森が消える、生きものが消える、食料と水の不足、子どもたちが働かされる、戦争、貧困、格差など、地球上で起きている問題の全体像と、私たちの暮らしとのつながりをお伝えしています。また、今年の 9 月からは、生物多様性の問題をテーマとした、パート 2 の展示会「生きものが消える」編の展示も始めました。

いま地球上で起きている問題はすべて、「命のことをまず一番に考えていたら、起きなかった」と思うことばかり。命の大切さを伝える「もったいない」という言葉とともに、厳しい状況で暮らす世界の子どもたちや生きものたちのパーソナルなストーリーを通して、心に響くメッセージをお届けできればと思います。展示とギャラリートークの内容を収録した同タイトルの本 &DVD「もったいないばあさんと考えよう世界のこと」は、この活動を通じて子どもたちに伝えてきた“私なりの ESD”です。ESD にかかわる多くの方にも活用いただけたら幸いです。

「自分さえよければと思わず、分け合う気持ちがあれば平和な世界が必ずできる。どうすれば、皆で幸せに暮らせるかを考えていこう。できることをやらないなんて、もったいない！」「命はすべてつながっている。そして、一つひとつの命が、大切なんじゃよ」――もったいないばあさんからのメッセージです。

※真珠さんの活動の詳細は、www.marikoshinju.com にてご覧いただけます

私たちが ESD-J に入ったわけ

Make a Difference-ICTで国際協働学習

NPO 法人 グローバルプロジェクト推進機構（団体正会員 2 月入会）

私たちは通称 JEARN（ジェイアーン）と言い、グローバルな教育ネットワーク（iEARN: アイアーン）の日本センターです。130 ヵ国 3 万校の小・中・高校生たちが、年間で 200 余ある各種のプロジェクトに取り組んで、オンラインで協働学習をしています。子どもたちが取り組む活動は Make a Difference として大切にしています。JEARN では、そのような取組みは持続可能な開発のための教育そのものではないかと思い、会員になりました。国内におけるプロジェクト参加校推進のために皆さんの力を貸してください。　連絡 : office@jearn.jp　http://www.jearn.jp/

政策提言プロジェクト

2014 年に向けた目標 & 戦略づくり

現在、ESD-J の中期戦略づくりに取り組んでいます。その第一歩として夏に実施した会員アンケートでは、28 団体、65 名（全体の約 22％）から回答をいただきました。現在は、その結果を踏まえ理事を中心に議論を重ねています。ESD-J の役割や 2014 年までに達成したい目標の明確化と、そのための戦略（「14 の提言」の再構成）などが議題です。議論の中で、「ESD は持続可能な地域づくりのための人づくり」と位置づけ、地域のエンパワメント、ボトムアップの人づくりを政策提言の中核におく方向にあります。また、ESD が目指す社会像をわかりやすく示す必要性が指摘されており、ESD-J として、非暴力、地域主権、再生可能といった持続可能な社会の「共通原則」を明確に打ち出すことにしました。

政策 PT では、「共通原則」や「2014 年目標」「目標達成に向けた戦略」の理事会案を作成し、全国ミーティングなどで会員の皆さんと意見交換しながら、年度内を目処に策定し、来年度以降の事業計画に活かしていきたいと考えています。

（政策提言 PT リーダー / 岡山ユネスコ協会 池田満之）

地域ネットワークプロジェクト

多摩市教委 ESD 研修会スタート

前号の当コーナーで紹介した「文部科学省ユネスコパートナーシップ事業」が始まりました。多摩市教育委員会による ESD 研修会です。

ねらいは、市内の小中学校で行なわれている地域調べ、福祉教育、どんど焼きなどの地域行事への参加、職場体験といった実践を、地域の NPO の協力、参加により ESD として授業化していくための視点や方法を、現場の教員が研究・共有しあうことです。そのために 5 回の研修会が設定され、11 月 12 日から来年 2 月 19 日まで行われます。

この成果は冊子にまとめられるとともに、既存の授業を検討した上でまとめられるカリキュラム改善案は来年度実行されることになります。

この方式が確立されれば、日本中の学校で既に行われている授業を ESD として実践していくことがうんと容易になると思います。

随時、本誌や HP などで紹介していきますのでご注目ください。

（地域 PT リーダー / エコ・コミュニケーションセンター 森 良）

ESD-J の活動紹介

研修・普及プロジェクト

ESDのコーディネーター養成が始まります!

12 月 12 ～ 13 日に「持続可能な地域づくり /ESD 実践者のための コーディネート実践トレーニング」（主催 : 環境再生保全機構 地球環境基金、企画・開催協力 : ESD-J）を開講します。これまで ESD-J はコーディネーター育成に関して度々議論をしてきました。今回はそれらを踏まえた最初の講座です。地域の課題について、多様な人びととの活動や学び合いを通じて解決に繋げていくために必要な能力＝ファシリテーション力とコーディネーション力を実践者の皆さんと高め合うことを目的としています。トレーニングは 2 つのステップに分かれ、地域や組織の課題を的確に把握する〈傾聴と課題把握〉と、その課題を解決するためのプロジェクトづくり〈協働プロジェクト企画〉で構成されています。ESD や地域づくりをコーディネートする実践者の方々にぜひ参加いただきたい講座です。この講座に関する詳細はウェブサイトでもご覧いただけますので、興味関心のある方はどうぞ、お問い合わせください。

（研修普及 PTリーダー / 日本ネイチャーゲーム協会 大島順子）

国際ネットワークプロジェクト

ESDの10年最終年会合に向けて始動

本年 3 月にドイツのボンで開かれた ESD の 10 年世界会議では、2014 年の最終年での総括会議をわが国で開催することが歓迎されました。わが国が ESD の 10 年の提唱国であることを考えれば、引き続き ESD の 10 年の推進に尽力し、その成功に貢献することが官民を通じた使命といえるでしょう。

ESD-J では、アジア太平洋地域に適した ESD 推進のための市民社会のネットワークをつくることを目標としています。これまでも、各国の市民社会組織との交流を進め、「アジアにおける ESD 優良プロジェクト（AGEPP）」などを通じて連携・協力の強化を図ってきました。

最終年会合に向けて、10 月 1 ～ 2 日に開かれた「ESD の 10 年・地球市民会議 2009」を共催し、また来年 10 月に開かれる「生物多様性条約第 10 回締約国会議（CBD/COP10）」へ ESD から貢献を果たす事業も開始しました。さらに現在、ESD を推進するアジアの NGO 同士の学びあい強化に向けた事業提案も進めています。

（国際ネットワーク PT リーダー / 金沢大学 鈴木克則）

★ ESD-J の実施事業に関しては、ESD-J のウェブサイト「ESD-J の活動」のコーナーで詳しく紹介しています。

トピックス 2014年「ESDの10年・世界の祭典」を実現しよう

ESD の 10 年最終年の総括会合が日本で開催される見通しです。ESD-J はこの最終会合を、政府と国連機関による公式会議とともに、市民を主体に企業や自治体、教育機関など、さまざまなセクターが参画し、世界から ESD 実践者を迎え入れる場にしたいと考えています。日本での実践を世界の人びとが知り、実践者同士が交流し、持続可能な社会とそのための人づくりに向けてポスト 2014 年を議論する場をオールジャパンでつくろうというものです。

その準備を始めるために、愛知万博以降、ESD を「愛知万博の理念継承」の重要な取組みと位置づけている方々を中心に「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラム（代表理事：ESD-J 阿部治）を立ち上げました。そして去る 10 月1 日～ 2 日、推進フォーラムと ESD-J、国連大学、日本経済新聞社などの共催で、「ESD の 10 年・地球市民会議 2009」を開催しました。「地球市民会議」の目的は、ESD の推進に向けた多様な主体の対話と連携のあり方の現状と今後について議論すること。当日は「参加・連携を生み出すコミュニケーション」のスキルや、社会のしくみを変えていく「市民発の政策提言」など、ESD の推進に必要な課題について議論しました。会議の内容は、11 月初旬に日本経済新聞の本紙に編集採録される予定です。

なお、「地球市民会議」は当面 3 ヵ年継続し、そのネットワークを広げていく計画であり、2010 年はアジアの人びととの連携にフォーカスしていきます。

お役立ち情報BOX ESD の実践に役立つ情報 あれこれ

書籍「君あり、故に我あり —依存の宣言」

サティシュ・クマール 著
講談社学術文庫、2005 年 4 月刊
344 ページ、1,100 円＋税

他者との“つながり”を学ぶ

この世界は、まさに『君がいて、私がいる』ことができる世界です。君とはすぐそばにいる人だけでなく、生物・自然・地球・宇宙までを含めての他者です。私たちは誰も一人で生きてはいけません。生命・物質が持つたくさんの関係性の中で生きているのであり、それを思い出し、考え、理解し、感謝し、相互に認め合い、支えあって生きることで、世界も個人もより豊かに生活ができる。そのことを著者のクマールさんは私たちに教えてくれます。本書は、洋の東西・性別・宗教を問わず、クマールさんが出会った偉人との対話を中心に、わかりやすい実例を豊富に交えて、私たちにこの地球で生きていることの意味・意義を伝えています。ESD も大切にしている視点の一つである“つながり”について、より深く理解するための一冊です。

※クマールさん来日、11 月 8 日（奈良）、11 日（京都）、18 日（東京）にて講演予定のようです。

（個人賛助会員・川崎宣輝）

社会をデザインするときに読んでおきたい本

新メンバー紹介 8～9月

2 団体、3 名の方が新たに会員として入会いただきました。

団体正会員　エネルギー環境教育情報センター　団体準会員　伊豆市立天城中学校
個人会員　北海道 1 名 関東 3 名

ESD-J だより

2009 年 8 月～ 9 月の活動報告

8 月 6 日	多摩市教育委員会夏季ネットワーク研修　講師派遣
8 月 10 日	安全・安心で持続可能な未来に向けた社会的責任に関する円卓会議　第 2 回総会 出席
8 月 24 日	「やんばる地域における持続可能な地域づくり講座」企画検討委員会　第 1 回開催
8月25-27日	エコ×エネ体験ツアー 2009@奥只見　アドバイザー派遣
8 月 31 日	環境省「地域の ESD の取組強化のための制度設計検討会」第 1 回開催
9 月 10 日	ESD ×生物多様性第 1 回全国窓口担当者会議　開催
9 月 10 日	ICA 地域別研修「持続的な開発のための環境教育 A ～地域活性化のためのエコツーリズム～」講師派遣
9月11-12日	地球環境基金環境保全戦略講座 ESDコーディネート実践トレーニング 講座検討委員会　開催
9 月 14 日	第 7 回 ESD カフェ 放課後に学ぶ地球のこと　開催
9 月 17 日	ESD レポート第 20 号編集会議
9月19-22日	「ESD ×生物多様性」北海道紋別事例ヒアリング　出席
9 月 25 日	理事ミーティング　開催
9 月 25 日	第 13 回 ESD 関係機関情報交換会合　出席
9 月 25 日	「やんばる地域における持続可能な地域づくり講座」企画検討委員会 第 2 回　開催
9 月 29 日	環境省「地域の ESD の取組強化のための制度設計検討会」第 2 回　開催
9 月 30 日	損保ジャパン CSO ラーニング制度 月例会　出席

編集後記

最近、日本水環境学会の ESD のシンポジウムに参加しました。講師の漁師の話は、川という現場で小学生から大学生までの参加者がひとりでに学べるようにファシリテートしているようすが分かる内容で、感銘を受けました。また、「海ごみサミット」に参加し、海岸で漂着ごみを拾いました。拾っているだけでごみの種類がわかり、ごみに書いてある文字でどこの国から来たかもわかります。現場が教えてくれました。（環境・国際研究会 / ESD-J 情報 PT 小寺正明）

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）
http：//www.esd-j.org/　e-mail：admin@esd-j.org
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-67　コスモス青山B2F
TEL：03-3797-7227　FAX：03-6277-7554

● 会員募集中：正会員（10,000 円）、準会員（3,000 円）詳しくは HP をご覧ください ●

発行：NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議　編集：ESD-J 情報共有プロジェクトチーム　レイアウト：河村 久美

ミックス品 FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです www.fsc.org Cert no. SGS-COC-2693 © 1996 Forest Stewardship Council
この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、フードマイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。